

近代文学研究叢書

第二十二卷

昭和33年9月5日 印刷
 昭和33年9月10日 発行
 昭和47年3月20日 二刷

[¥ 2500]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一〇七 小林寅次	東京都千代田区神田錦町三丁目二番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一〇七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七 電話(四二)五一三一、三八番

近代文学研究叢書

第二十二卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村本保人濱能成内辻玉島山佐笹佐坂木河片荻太石

田松間 見德勢瀬 井田 藤澤 本 原
鱧 桐 田井森田
坂 藤村 宮 木由俣 井
澄定久 圓太頼正 幸謹 幹美 實顯 三磯延吉
八五 泉

夫孝雄都吉郎賢勝濯鑑助二允二明郎郎修英智水郎吉男貞

(國語学) (近代文学) (近代文学) (国文学) (近代文学) (美 学) (国語学) (近代文学) (仏文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (和歌文学) (俳文学) (比較文学) (英語学) (児童文学) (国文学)

口 絵 写 真

三	厨	ヶ	有	池
木	川	丨	島	邊
天	白	べ	武	義
遊	村	ル	郎	象

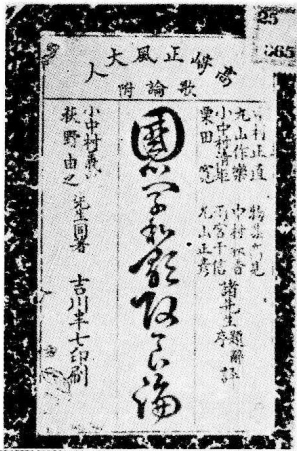
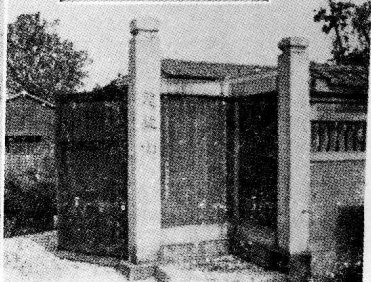
義 象 肖 像



「当世風流五十番歌合上下」——明治四十年三月刊

義象の撰文のある江東区亀戸町の慈雲山
竜眼寺(通称萩寺)

「日本文学全書」明治二十三年
四月刊(昭和女子大学蔵)



「国学和歌改良論」——明治二十年七月刊

(国立国会図書館蔵)

「日本法制史」——明治四十五年一月刊

(昭和女子大学蔵)

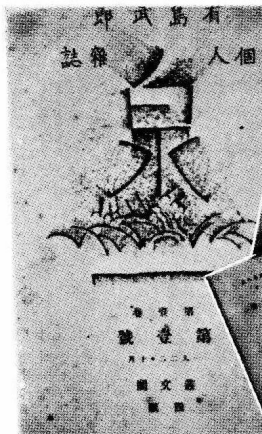


「藤園詠草」の一部——大正二年八月刊

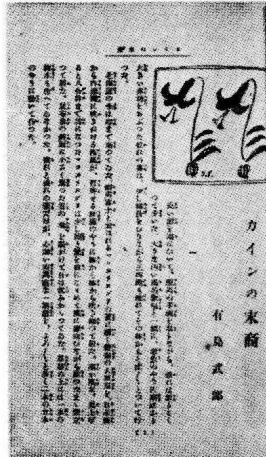
(小中村義教氏蔵)

有島武郎

武郎肖像→



「ホイットマン詩集」二冊―第一輯（大正十年十一月）と第二輯（大正十二年二月）
（昭和女子大学蔵）
中央「有島武郎著作集」全十五輯の
一部―大正六年十二月と同年
四月刊（昭和女子大学蔵）



↑ 札幌市北二十八条東三丁目
に現存する旧居
← 浄月庵（軽井沢）の記念碑

左上―個人雑誌「泉」―大正十一年十月創刊（昭和女子大学蔵）
左下―「カインの末裔」―新小説十二年八号所載（昭和女子大学蔵）

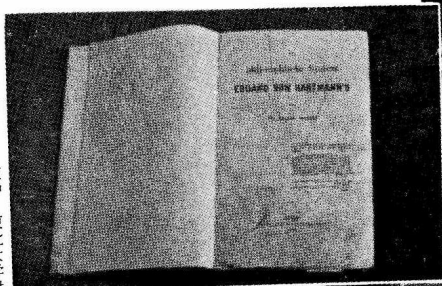
ケ ー ベ ル

System Eduard Von Hartmann's —1884 刊
(東北大学図書館蔵)

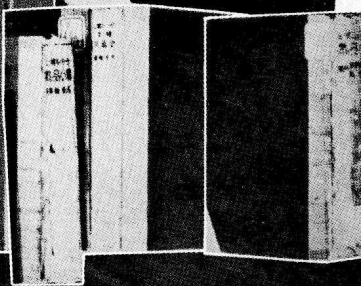


ケーベル肖像

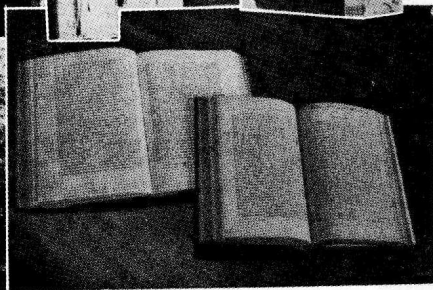
「ケーベル博士小品集」—大正七年六月刊(昭和女子大学蔵)
「ケーベル博士続小品集」—大正十二年一月刊(昭和女子大学蔵)



左中—東北大学附属図書館内のケーベル文庫の一部



豊島区雑司ヶ谷墓地にあるケーベルの墓



「ショーペンハウアー哲学とショーペンハウアーの解脱論」—1888 刊 (東北大学図書館蔵)

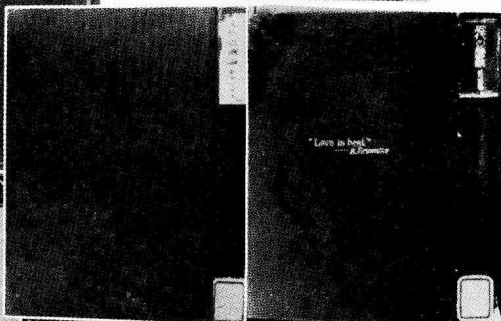
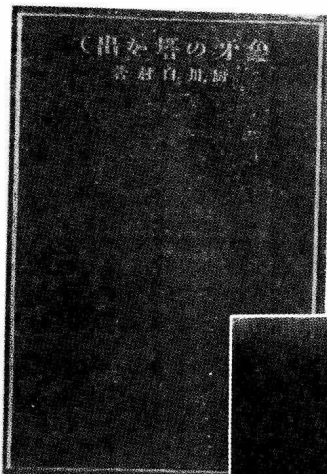
厨川白村

白村肖像→



「近代の恋愛観」——大正十三年一月刊
↓
(昭和女子大学蔵)

「象牙の塔を出て」——大正九年六月刊 (昭和女子大学蔵)



「小泉先生そのほか」——大正八年三月刊 (昭和女子大学蔵)

京都黒谷山内にある白村の墓→



「近代文学十講」
大正四年五月刊
(昭和女子大学蔵)

三 木 天 遊

右下、新小説五号（明治二十九年十一月）に所載の小説「鈴舟」
天遊肖像（昭和女子大学蔵）



「松むし、すず虫」―明治三十年五月刊（昭和女子大学蔵）



詩集「春くさ」―明治三十四年
十月刊（昭和女子大学蔵）

「早稲田文学」五月号（明治二
十八年五月）所載の詩「疎雨」
（昭和女子大学蔵）

目次

口	第二十二卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(一〇)
凡	例	昭和女子大学編集室……(一五)
池	邊義象	近代文学研究室……(一七)
有	島武郎	近代文学研究室……(一九)
ヶ	ル	近代文学研究室……(二三)
厨	川白村	近代文学研究室……(二五)
三	木天遊	近代文学研究室……(二七)
近代	文芸年表	近代文学研究室……(三三)
末	付記	近代文学研究叢書編集室……(四七)

第二十二卷の成立

本巻には大正十二年三月から同年九月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

池邊義象は文久元年十月三日熊本藩士池邊軍次の二男に生まれた。祖父は丹陵先生と呼ばれ時習館に教鞭をとった勤皇家、父軍次も神風連に属し西南の役には薩軍に加わった。明治十二年（十九歳）伊勢神宮教学院に入学したが十四年閉鎖されたので上京し落合直文と共に復興建議書を草し台閣諸公に訴願して廻ったが成功しなかった。十五年東京大学古典講習科開設と共に入学直文と並んで成績常に優秀。在学中同科教授小中村清矩に囑望されて女婿となった。義象の国文学者としての第一歩は小中村清矩主任の「古事類苑」の編纂に加わったことから始まる。十八年同学諸氏と東洋学会を起し「東洋学会雑誌」を発行して当時の欧化万能の風潮に抗し国粹保存論の先駆をなした。二十三年第一高等中学校（後の一高）教授、皇典講究所講師。同年直文、萩野由之と「日本文学全書」を編纂博文館から発行した。当時は古典が乏しく学校の講読用にも事欠く状況であったので全書の発行は国文学の普及に貢献したこと測り知れざるものがあつた。二十六年直文と浅香社を結成。二十七年十月養父清矩急逝。後家庭の事情によって池邊姓に復帰した。

三十一年一月公務を辞して歐洲遊学の途に上り三十四年二月帰国。三十六年六月京都帝国大学講師を囑託され、京都に住み日本法制史を講じた。大正三年以後明治天皇御記、御製集、昭憲皇太后御歌集の編纂に従事、

十二年三月一日編修局で倒れ六日午後四時自邸で永眠した。享年六十三歳。

有島武郎は明治十一年三月四日東京市小石川水道町に生まれた。父武は大蔵省官吏で薩摩の北郷藩の旧家臣、母幸は旧南部藩士加島氏の女で、有島は自分の性格に南方的明るさと北方的暗さがあると考えていた。幼年期を横浜で送り、英和学校に入ってから欧米流の自由教育を、家庭では厳格な武士道的訓育を受けた。明治二十年学習院初等科に入学、中等科に進んだ時皇太子（大正天皇）の御学友に選ばれた。明治二十九年札幌農学校に入学。同校を選んだのは虚弱で都会生活に適さないことと北海道という自由の天地に少年らしい憧れを抱いたためであろう。そこで家族の反対を押しきってキリスト教に近づいて内村鑑三の教会に通い、キリスト者的生活に生きようとして肉欲との相剋に悩んだ。兵役を終り、三十六年渡米、ハーバード大学、ハーバート大学で歴史学と経済学を専攻したが、むしろ文学に多くの親しみを感じホイットマン、トルストイ、イブセン、クロポトキン等の影響を受けたために懷疑的になり、キリスト教から離れ、文学によって自己の真の姿を見出そうとするに至った。

四十年四月帰国。四十一年東北帝国大学農学部（北大前身）英語講師として北海道に行った。翌年結婚。四十三年四月「白樺」の同人となり創作活動に入った。大正三年秋妻安子が肺を患ったので大学を休職して帰京、その献身的看護は世の女性を感動させた。妻の死後遺稿集「松むし」を編み、三児を抱いて悲嘆から立ち「自分の生きて行くべき大道にさまよい出」た。その後彼の文学は活躍期に入る。第一次世界大戦後わが国

にも社会主義思想や労働運動が盛んになるが、滞米中から社会問題に関心を持っていた彼は自己の資本家的な立場に悩みを感じ北海道の所有地を小作人に解放した。彼の生活は次第に苦悩と虚無の深みに陥り、大正十二年六月八日軽井沢の別荘で生を終るまでの四十五年は誠実に敏感に自己を苦んだ生涯であった。

ラファエル・フォン・ケーベルは一八四八年（嘉永元年）一月十五日ヴォルガ河畔の古都ニシニイ・ノフゴロッドにロシア人グスタフ・ウィルヘルムを父としロシア人とスエーデン人の血の混った母マリアとの間に生まれた。一歳で母を失い、貴族的気品と教養の高い祖母の許で良いしつけを身につけ、長じてモスコの高等音楽学校に入学、楽才を認められたが哲学に興味をもちショープンハウアーの哲学に魅せられた。次いで自然科学者を志してイエーナ大学に入った。が、再び哲学に転じ、ハイデルベルヒ大学に学んだ。学位論文ジョーペンハウアーの研究の時ハルトマンと相識するに至り、彼の斡旋により東京帝国大学哲学教師の招聘を受けた。長い航海、地震、英語力の不足などで躊躇していたがハルトマンの切なる勧めで日本赴任を決心したのである。大学における彼の講義は単に先哲の思想の祖述や紹介に止まらず、全人格で味わった生活体験の余韻をも加えた。従って第一義諦に生きんとする学生の自覚を呼び醒ます天来の声となった。門下からわが国哲学界の基礎を築いた碩学が輩出したのもその功にもとづく。彼はまた上野音楽学校にピアノと音楽史を教えた。ペートウヴェンの理解者としてまた浪漫的音楽のよき紹介者としてドイツ音楽の伝統をわが国に移した。

東京帝国大学との第七回目の契約期限が大正三年七月に切れ愛弟子久保勉を伴って帰国途につこうとした時

第一次世界大戦が起つたため日本にとどまった。大正七年戦雲も漸く収まったが病床の彼は重態となり大正十二年六月十四日の夜横浜のロシア領事館の一室で眠るが如く息を引取った。享年七十五歳。葬儀は久保勉が故人の愛誦したルカ伝二十四章の一節を朗読し遺言通り質素に行われた。

白村、厨川辰夫は明治十三年十一月十九日京都市に父磊三、母セイの長男として生まれた。父磊三は旧豊前中津藩士、広瀬淡窓に学び長崎に出て蘭学を修めた。白村出生当時は京都府勸業課に勤めていた。白村は中学生時代から文学的才能に恵まれ、明治三十一年九月三高入学後は文芸趣味いよいよ深まり、英文学のみならず広くわが古典文学をも耽読し明星派のロマンティックな和歌に心酔していた。三十四年九月東京帝大英文科に入学、卒業の時成績優秀で恩賜の銀時計を賜わった。更に大学院に進み漱石の下で「詩文に現われたる恋愛の研究」にしたがったが事情により九月の新学年から第五高等学校（旧制）教授として熊本に赴任した。三十九年福地（櫻痴の義妹）蝶子と結婚。翌年九月母校第三高等学校（旧制）に転任。大正二年九月上田敏の推薦で京都帝大文学部英文学科の講師となる。同四年に米国留学を命ぜられたが足部の火傷に黴菌が入り不幸にも左脚切断のやむなきに至った。翌年隻脚をひっさげて渡米東部諸州の大学を歴訪して帰朝、助教授に任ぜられ、七年文学博士、八年教授に任ぜられ、詩文学講座を担当した。その浪漫復興期及びヴィクトリア朝における詩の註解評釈は今までの紹介よりも一步をすすめ、特に高雅、清澄、不羈、奔放のブラウニングに深い共感を抱き、その思想の敷衍に努めた。また「近代文学十講」「文芸思潮論」などにより欧米近代文学を体系的に紹介、つ

づいて「象牙の塔を出て」「十字街頭を往く」「近代の恋愛観」などを出版し、文芸思潮を背景とした批評は読書界を裨益することすくなくなかった。

大正十二年九月一日鎌倉の別荘で関東大震災に遭い戸外に遁れ出たものの不具の悲しさ泥田に転落し、助け上げられたが翌二日夜半惜むべき生を閉じた。享年四十三歳。

天遊、三木猶松は明治八年三月十二日兵庫県赤穂市加里屋に省六、恒子の二男として生まれた。祖父は海運業を営みその富は一時藩公を凌ぐといわれた。父母共に風雅を愛す人であった。天遊五歳の時父は大阪に出て薬種商と茶問屋を開いた。明治二十七年府立北野中学校から東京専門学校に進み、「早稲田文学」に多くの新体詩を発表し天来、玉茗、代水、花外等と共に新進詩人の代表であった。病気のため学業を廃して帰阪。後「よしあし草」「小天地」その他に拠って関西文壇に活躍した。彼の詩は情熱に富み思惟に満ち調べが強く、叙事詩に勝る。「生れざりし詩集」「心の山川」に収める筈の「高山に登りて大河を観るの歌」は自然と人間の冥合と神祕を歌って妙を極む。三十四年大阪毎日新聞の懸賞小説に応募したが落選、これは大きな痛手であったらしい。性廉潔自負心強く、孤独を愛するところもあった。三十歳を越えて妻も迎えず家も持たず、明治四十年頃には消えるが如く文壇を退いた。その後の動静は明らかでないが関東大震災後全く消息を断った。上京中遭難死亡したものと思われる。とすれば享年四十九歳となる。

(昭和女子大学近代文学研究室)

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであらう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従つて死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名